

浦和自然観察会

—秋ヶ瀬河畔林 ピクニックの森から—

定例自然観察会 報告

○259回（10月8日）テーマ「秋の七草と万葉集—クズの有用性」（リーダー塩島貞男）

中秋の季節に語るのはやはり秋の七草。「萩の花 尾花葛花 撫子の花 女郎花また藤袴朝貌の花」（山上憶良）。冒頭、板橋（宿）の名ガイド塩島貞男リーダーから万葉集に詠まれた秋の七草、各1首の紹介がある（参考：万葉集収録歌数は4516番（首）、詠まれている植物数は157種）。この日、秋の七草からテーマに選ばれたのは葛（クズ）。アメリカではグリーンスネイクと呼ばれる厄介者だが、わが国では、クズは多くの詩歌のモチーフとして植物文化史に欠かせぬ存在である。葛布、くず粉、葛根湯など多様な有用性もよく知られるところである。「葛布」は「芭蕉布」、「しな布」と並ぶ三大古代布。リーダーは首尾よくクズの繊維見本も用意、図・写真を提示して解説。「くず粉」の作り方にも言及、掘り出しから根を砕き、真水で洗ってデンプン質を沈下、乾燥するまで大変な手間暇を要する。それゆえ高価な食材。葛根湯は風邪薬として病院でも処方される。次の話題は、新秋の七草の「ヒガンバナ（曼殊沙華）」。昭和10年、日日新聞が提唱、文人らが「新秋の七草」を選んだ。その一つに歌人の斎藤茂吉が「曼殊沙華」を選んだ。ヒガンバナの方言も語源ごとに解説。墓地でよく見られることからユウレイバナ、花色からカジバナ、毒があるからドクツバナ、シビレバナ、花期には葉（歯）がないことからハッカケババア。地方名は1000に及ぶ。これは日本人の生活に密接に関わってきた植物であることの証左。以下、この日観察した主な植物。カントウヨメナ、ユウガギク、サデクサ、ニオイタデ、コメナモミ、アレチハナガサ、イノコズチ、サヤヌカグサ（以上開花）、チョウジソウの実、イワウメヅル（葉）など。参加者14名

○260回（11月12日）テーマ「ひっつきむし」（リーダー安達竹雄・安達久枝）

秋ヶ瀬ピクニックの森も実りの秋を迎えた。植物は子孫存続のため、あの手この手で種子を散布する。種子の散布は風散布、水散布、被食動物散布など多岐に亘る。この日のテーマは付着動物散布「ひっつきむし」。レジュメはカラー付16頁に及ぶリーダー安達夫妻の創意工夫の力作。河畔林の紅葉、野鳥のBGMの中、写真ツールのプレゼンも交えて、お二人連携のインタープリテーション。「ひっつきむし」もいろいろなタイプがある。堅いフック型（オオオナモミ、オヤブジラミ、ウマノミツバ、キンミズヒキ、ダイコンソウ、ミズヒキ）、柔らかいフック型（アレチヌスビトハギ、ヌスビトハギ）、逆さトゲ型（コセンダングサ、チカラシバ、ササクサ）、ヘアピン型（イノコズチ）、粘液型（コメナモミ、ヤブタバコ、チヂミザサ）など。「ひっつきむし」がヒントになったマジックテープ（「面ファスナー」）の話も面白い。開発者のスイスのマエストラさんはオナモミによく似た野生ゴボウの実で仕組みを観察、発明のヒントを得たという。「ひっつきむし」も有用植物だ。この後、ピクニックの森に分け入って「ひっつきむし」探し。秋ヶ瀬河畔林の木の実、草の実、咲き残りの花の観察も楽しむ。上記の「ひっつきむし」はおおむね観察できた。参加者14名。

※この日、ピクニックの森はサンショウクイを目当てに各地から集まった鳥屋さんの大きな望遠カメラの砲列。その数40名。名はヒリリヒリリと鳴くことから山椒の辛さに因むらしい。

《定例観察会への参加と入会のご案内》

- 日 時 毎月第2日曜日 午前9時～正午まで、
- 集 合 秋ヶ瀬公園「ピクニックの森」入口駐車場隣。参加費300円（保険・資料代）
- 問い合わせ 代表 古橋光弘 携帯090-3228-4177